

緑  
亀

下足箱の上に置いてある水槽の中には、息子の隆がまだ小さかった頃に行った稻荷神社の縁日で買った緑亀の亀吉が今も生きています。生きていたというのは、与えた餌を残さずきちんと全て食べているからだ。縁日の子供用のプールで泳いでいる亀の中から隆が自分で選んで買った時に亀吉が何歳だったかはわからないが少なくとも下足箱の上で二十五年間毎日ほぼ変わらない同じ風景を彼は見続けている。ほぼ変わらないのは、下足箱の上からの風景だけであつてこの二十五年の間に私を取り巻く環境は大きく変わった。隆の父親がここに帰つてくることが無くなり、隆も数年前に東京で就職し出て行った。すっかり空っぽになった下足箱の中は、亀吉からは見えないが玄関を出入りするのが私だけになったことは多分気づいていると思う。

近所のペットショップで買って来る米粒大のペレットを毎日決まった時間に決まった数をあげ続けているのは、彼が我が家にやって来た最初の数日を除いて私ただ一人だ。買った時はたった数センチ

の緑亀が今では、もう三十センチ近く成長し、亀吉には狭すぎる水槽の中では回転することができず、前に行ったり後ろに行ったりしか出来ない。それを見ると、高校の物理の時間に習った単振動という言葉を思い出す。それにしてもこのペレットに一体どれ程の栄養が含まれているのか不思議でならない。

行政書士の資格を大学卒業して程なく取得し、行政書士だった父の事務所に入っただけで合い、結婚、出産と同時に今の家も両親の援助で買った。その全てが真つ直ぐに判を押したような流れだったし、仕事柄それが至極当たり前のように思っていた。この仕事に関係する世界しか知らない、もう少し他の世界を見てみるも良かったかもしれないと人生の判が掠れる度に思うが、今となってはもうどうでもいい。丁寧に使ってきたつもりでも廊下の決まった場所に足が乗るとギギギギと音が出る。鶯張りの御殿だと最初は言っていて笑っていたが、いまはもう笑う人もいない。父が亡くなり事

実上その事務所の所長となった私は、父と共に仕事をしていた事務員の方々に随分と助けられこま  
でおかげさまで忙し日々を過ごしてきた。ただ、事務員の皆は、私より年上なため徐々に事務所を去  
っていきいよいよ事務員が二人だけになった時に事務所を畳むことを決意した。来年で六十三歳にな  
るし世間的にも仕事をやめても何も言われなだろうと思ひ、数年前から徐々に依頼を断るようにし  
仕事を整理してきた。それと同時にもう使っていないワードプロセッサや誰もいない部屋に置いて  
あるブラウン管のテレビなんかも徐々に処分しようと思ひ始めた。いわゆる終活だ。

亀吉は、毎日同じ時間に餌を与えているのに、一度も自ら首を伸ばして唯一の飼い主に近づいてき  
たことがない。もちろん鳴きもしないし短く固そうな尻尾だつて降つたのを私は一度も見たこともな  
い。定期的に水槽から出し、意外と汚れるガラスを磨き水を換えカルキ抜きを入れて私に気を使  
う振りさえしたことがないが、仕事を辞めた今となつては、誰とも話さない日も珍しくなく唯一の話

し相手なので気が紛れて助かっている。

不要となった家電や家具や本なんかは、今は簡単に引き取ってくれる業者を見つけることができる。しかし大きく育った亀を引き取ってくれるところがあるのだろうかと思ひ、色々と検索してみると同じ悩みを抱えている人たちが全国にいるのだと知った。緑亀の平均寿命は知らないが、亀吉は下駄箱の上からの眺めしかほぼ知らないし、餌だつてここに来てから一度も自分で取ったことはない。そんな緑亀を家の近くを流れる須川の土手に放つことなど最初から考えもしなかった。どこか安全で毎日餌を与えてくれる場所はないかと調べると早咲きの桜で有名な静岡県の河津というところに爬虫類と両生類だけを飼育展示している動物園があることがわかった。なんでも家庭で育てられなくなつた爬虫類などを無料で引き取ってくれるらしい。ここなら安心して亀吉も余生を過ごすことができるだろう。他の亀とのふれあひは、あの緑日以来だけど他の亀の餌をがめつく取るようなこともしない

だろうし、きつとすぐに友達もできるだろうと、いつの間にか自分と同じような性格だと思っているふしもある。念の為水槽の中に向かって私が考えている亀吉の老後プランを話してみたが餌をくれるのかと勘違いをすることすらなく予想通り全く反応がなかった。

行政書士の仕事は、一言一句間違えてはならない。それが基本中の基本だ。それもあつて、念には念を石橋をあらゆる角度から叩いて叩いて渡るような性格が体の隅々まで染み渡っている。仕事も仕事以外の日常でも。その動物園に大きくなつた緑亀を引き取つて欲しいと連絡をし、どのような形で持つていけばいいのか、いつも食べているペレットはどれくらい持参した方がいいか、かかりつけの医者との診断書は必要か、譲渡する際の誓約書なるものも事前にファクスで送つてもらい、それに対する質疑も送り回答も得ている。全て確認済一点の曇りもない状態だ。そう、河津桜のほころび具合も観光協会に電話しもちろん確認している。

福島駅から新幹線を乗り継ぎ熱海駅で在来線に乗り換え河津駅で下車するまでに間、亀吉はどこへ連れていかれるのか不安になり騒ぎ出すこともなく少し軽い漬物石でも運んでいるかのようだった。縁日の日に家に来て以来の外出だというのに。

その動物園は、閑散としていた。基本的に冬眠する動物ばかりなので屋外にいるのは、亀ぐらいだった。それでも寒いのは苦手なようで皆日差しがさすところでじつと甲羅干し、こんな時期に来る来園者を歓迎するそぶりは微塵もない。事前にやり取りを綿密にしていたので動物園の担当者ともスムーズに話が進みあつけないほど簡単な亀吉との別れになった。数匹が甲羅干ししている外の池のあるところにそつと置かれたら、一度もこちらを振り返ることなくなんの躊躇もなくスタスタと他の亀が甲羅干ししているところへ歩いて行つた。先輩亀達に挨拶でもするつもりなのか。そう、彼がこの二十五年間一体何を考え、何を思いあそこで大きくなり続けていたのかわからない。もつともわからない

いのは、彼のことだけでなく自分の家族のことだつて同じだ。隆の父親がなぜ帰つてこなくなつたのか今もわからない。彼が振り返ることもなくスタスタ歩くのを見てホツとしたので園内を見て廻つた。亀の大きさによつてなのか餌の種類によつてなのかいくつかのグループに別れ飼われていた。蛇やトカゲやカメレオンなんかは、皆ぬくぬくとした暖かい部屋に入れられている。一通り見てを廻り彼の様子を見てから帰ろうと思ひ元の場所に戻つてみたら、彼がどれなのかももうわからなくなつてしまつた。彼の特徴を何も覚えていない。もつとも他の亀と比較をしたことがないのでそれも仕方がないのかもしれないが、二十五年間毎日見続けていたにも関わらず全くわからないことに驚きよりも少し寂しさが勝つていた。何か印でもつけておけばよかつたとも思つたが、おそらくもうここに来ることもないだろうからそれもいらなとすぐに思ひ返した。

日が傾きかけた駅へと向かう道にも桜があつた。まだ蕾の先から少し濃いピンク色がのぞいている程

度で数日前の暖かな日に観光協会に電話した時は、来られる頃には開花していると言っていたがこの寒さで遅れ気味なのだろう。そんなことを考えながら今晚泊まる熱海へと向かった。車窓から時折覗く海は、風が吹いているからかキラキラと輝いていた。

宿は、熱海駅からお土産屋が連なるアーケードを下つてすぐのところに建っていた。宿の規模は、アーケードからのぞいている部分では想像できなかったが、チェックインの際に渡された館内の案内図には、本館と別館からなりそれぞれ八階まであり、そして本館と別館それぞれに温泉がある相当に大きな宿のようだ。夕餉の希望時間、明日の朝餉の希望時間、温泉に入れる時間、あとなにかいくつか説明があつたと思うがあまり重要なことではないと感じたのか全く覚えていない。流暢な日本語でよりも標準語に近いアクセントで説明するカタカナ名の名札をつけた受付の彼女からなにか質問はありますかと尋ねられたが、特に何も思い浮かばなかった。

ようやく渡された鍵には、透明なアクリル棒にかすれ消えかかった六〇三と部屋番号が彫られ近頃あまり見かけない形をした金属の鍵が一つぶら下がっている。色々とリニューアルを施しているのだろうが赤い絨毯が引かれただだっ広いホールの片隅には、木目調の長机の上に積んである土産がどこか昭和の温泉宿の雰囲気を残している。その脇を抜けガラス窓の付いた古びたエレベーターに乗り上行きのボタンを押し、六階に近づく短い航跡を連れた初島に向かっている一艘の船が見えた。

公団住宅のようなクリーム色の鉄扉に鍵を差し中に入りレースのカーテンを開けると海は見えさつき到着した新幹線のホームを轟音とともに通過する新幹線が見えた。彼を置いてきた今は、荷物というほどの荷物もなく部屋に入つてすぐにベッドの上に置いてある浴衣を持つてとりあえず本館地下の温泉へと向かうことにした。これだけの部屋数があるのにエレベーターはたった二機しか無い。だから、下行きのボタンを押してもなかなかやつてこない。エレベーター横の窓から、さっきの船を探してみ

るも見つけることはできなかった。明日もし天気が良ければ、あの船に乗って初島に行くのもいいかもしれないと思つたが、そんなことはせずにまっすぐ家に帰る自分をよくわかっている。地下一階の温泉は、宿の売りなのだろうか全面改装されている。脱衣室には、カゴが三十個ほど並べられているのでさぞ大きな温泉かと期待して入つたが、駐車場二つ分に満たないの無色透明なお湯が張つた湯船が一つだけだった。それでも、冷えた身体が芯から温まるのをゆつくり感じていた。

指定された時間ぴつたりと二階の夕食会場へと足を運んだ。バイキング形式のシルバーの容器には、和洋中様々な料理が並び家族やグループで訪れている宿泊者達が楽しそうに手分けし料理を運んでいる。席は二人席と四人席があり一人できている私は、一番奥の二人席に前菜数種類と中ジョッキが乗つたトレイを置いた。この奥の席からは、ほぼすべての宿泊客が動き回っているのが見える。それを見ながら一人で夕食を取っていると、隣のテーブルに座っている同じく一人で来ている見るからにサ

ラリーマンで無い髭に黒い丸眼鏡を掛けた男が声を掛けてきた。二杯目のビールを飲み干したタイミングで。